

# UWCの概要

2024年9月

(公社)UWC日本協会

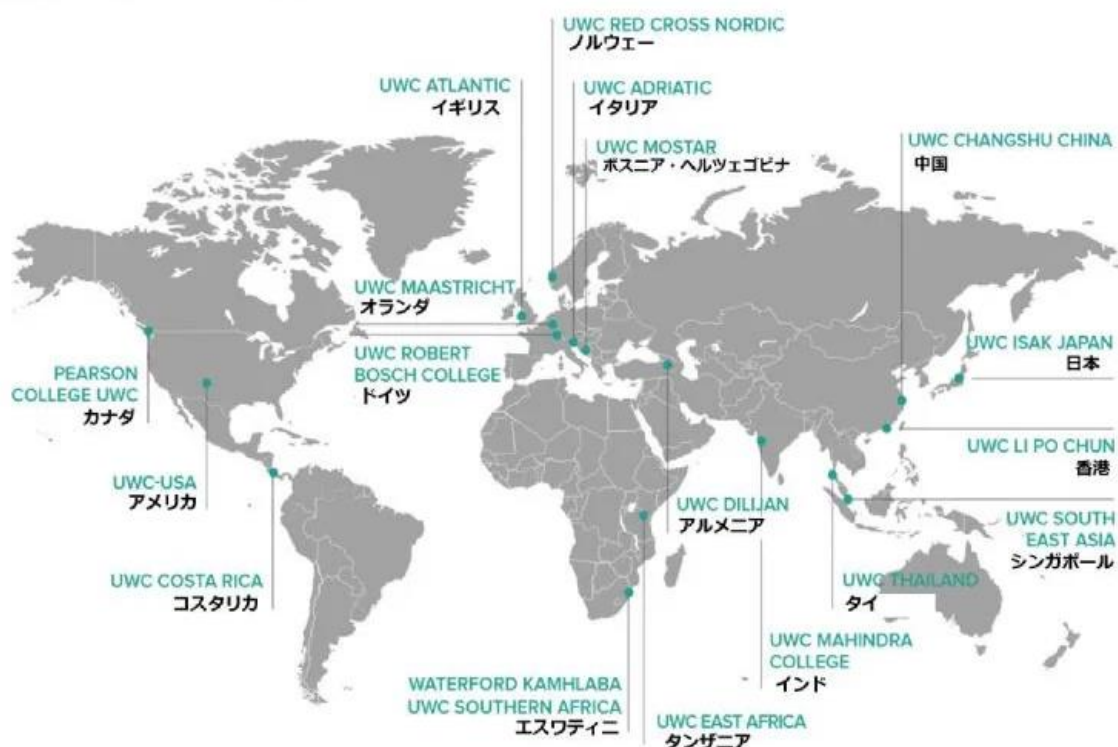
## 1. UWCのプロジェクト

UWC (United World Colleges) は、世界各国の国内委員会 (UWC National Committees) が選抜・派遣した生徒 (日本の場合、派遣時、高校2年生) を中等教育期間終了前の2年間受け入れ、国際感覚豊かな人材を育成することを使命としている。国際感覚豊かな有能な人材を多数養成していることから、国際的な相互理解という点で大きな貢献を行っている。

UWCの最初のカレッジは、1962年に開校したイギリス校である。その後、カナダ校(1974年)、シンガポール校(1975年)、エスワティニ校(1981年)、イタリア校(1982年)、アメリカ校(1982年)、ベネズエラ校(1988年、2012年開校)、香港校(1992年)、ノルウェー校(1995年)、インド校(1997年)、コスタリカ校(2006年)、ボスニア・ヘルツェゴビナ校(2006年)、オランダ校(2009年)、ドイツ校(2014年)、アルメニア校(2014年)、中国校(2015年)、タイ校(2016年)、日本校(2017年)、タンザニア校(2019年)が開校し、現在、18校のカレッジがある。

[UWC紹介ホームページURL](https://www.jp.uwc.org/) ※各カレッジの様子が写真等で確認できます。

<https://www.jp.uwc.org/>



## 2. UWCの組織

### (1) UWC会長 (UWC President)

UWCの国際組織、すなわち国際評議員会・理事会、各国国内委員会、各カレッジを大所高所から積極的に指導する。歴代会長は英国のマウントバッテン伯爵、チャールズ英国皇太子（当時）（1978年～1995年）、ヌール・ヨルダン王妃とネルソン・マンデラ元南アフリカ共和国大統領（共同会長・1995年～1999年）が務め、1999年にマンデラ氏が名誉会長に就任した後は、ヌール・ヨルダン王妃が単独で会長を務めている。

### (2) 国際評議員会 (UWC International Council)

5年ごとに開催され、UWCの事業と運営に関して助言を行う。

### (3) 国際理事会 (UWC International Board of Directors)

有識者や各カレッジの校長、UWC国内委員会の代表、卒業生ネットワークの代表などから構成されるUWCの運営組織である。具体的には、UWCの運営、運営に関する政策の立案・実施、UWCの各カレッジへの協力・支援などを行う。過去には、小笠原敏晶ジャパンタイムズ会長（当時）、盛田昌夫ソニー業務執行役員SVP（当時）が国際理事を務めた。

### (4) UWC国内委員会 (National Committee)

該当国において、各カレッジに派遣する生徒の選抜、支援を行う。

## <UWC日本協会 (UWC Japan National Committee)>

UWC日本協会は、UWCの日本国内委員会として1972年に設立され、当時の経団連会長であった植村甲午郎氏が初代会長に就任した。同会は1975年に社団法人ユナイテッド・ワールド・カレッジ日本協会に改組、2012年4月1日より公益社団法人に移行している。

1978年にはソニーの盛田昭夫会長が第2代会長に、1995年にはUWC国際理事であるジャパンタイムズの小笠原敏晶会長が第3代会長に、1999年に全日本空輸の野村吉三郎社長が第4代会長に、2007年に朝日生命保険の藤田讓社長が第5代会長に、そして、2022年にアサヒグループホールディングスの小路明善会長が第6代会長に選任され、現在に至っている。

設立以来、UWC日本協会は、UWCの日本での窓口として、UWCの趣旨に賛同し、日本協会の会員となっている会員企業（現在52社および個人）から奨学金の原資となる寄附金を集めるとともに、奨学生の選考、派遣に関する業務などを行っており、これまでに700名を超える生徒を全世界のUWCのカレッジに派遣している。設立当時から、経団連が事務局を務めている。

※本項の役職名は、就任時のもの。

### 3. UWCの特徴

#### (1) 理念

「教育を通じて、人々や国や文化を結び、平和と持続可能な未来に貢献する」

#### (2) 生徒の多様性

派遣される生徒は世界150カ国以上にある国内委員会が選考しており、カレッジで学ぶ生徒は、奨学金を活用して学ぶ難民から王族に至るまでその社会経済的背景はさまざまである。

#### (3) カレッジが所在する国・地域ごとの特色

各カレッジの在校生の10～30%は、所在する国・地域の出身という特徴がある。歴史・文化・成長分野に関する学びについては国・地域ごとに異なる。

### 4. カレッジにおける教育＝「国際バカロレア（IB）教育」

カレッジでの教育は、世界の多くの大学で入学資格として認められている国際バカロレア（International Baccalaureate＝IB）のカリキュラムにのっとっており、各国から招聘された優秀な教師陣が授業を行っている。生徒たちはこのIBの資格を取得すべく、勉学に励んでいる。

一般に各IB科目の要求水準は高く、幅広い知識とともに深い理解力・洞察力が要求される。これに対して、カレッジ側の生徒への配慮は大変きめ細かい。カレッジの担当者が、定期的に勉強の進み具合を確認し、学習方法、進路指導、その他生活一般について生徒を指導する。授業は少人数のクラスで行われ、活発な討論を交えた密度の濃いものとなっており、科目によってはゼミ形式が採られたり、自主研究が課せられたりすることも多い。また、UWCが国際的な学校であることから、授業で扱われる問題も国際的なものが多く、授業での活発な討論を通じて、教科書からは得られない多くのことを学ぶことができる。こうした環境のなかで、生徒たちの知識と判断力が向上していく。

また、社会への奉仕活動にも熱心に取り組んでいる。IBのプログラムの一環として、社会福祉・海難救助・海洋生物調査・森林整備などの活動を行っている。奉仕活動は定期的に行われており、カレッジでの生活において重要な役割を果たしている。これらの活動はUWCならではのもので、日本の高校では経験しがたいものが多い。青年期におけるこうした経験は、責任感や友情を育て、地域社会との交流にも役立っている。また、奉仕活動を通じて、生徒たちはカレッジの理想とする国際理解をさらに深めている。

奉仕活動のほかに、各生徒はIBのカリキュラムに従って、芸術系と体育系のアクティビティ（日本のクラブ活動に相当）に参加することが奨励されている。

(\* 国際バカロレア (The International Baccalaureate＝IB) については別紙参照)

以上